経済研究所所報
第 4 号
2024 年 1 月

書評

末吉順治『輸出陶磁器と名古屋港』中日出版、2020 年

SUEKICHI Junji（2020）, *Exported Ceramics and the Port of Nagoya,*
Chunichi Publishing Company

森川浩一郎 *

MORIKAWA Koichiro*

評者である私は、子供の頃名古屋市千種区の丘陵地帯にある住宅地に居住していた。そこからしばらく北方向にやや急な坂道を下り、さらに 1 キロほど歩いていくと矢田川の河川敷にたどり着く。昭和 40 年代くらいの記憶だと思うが、そこから眺める矢田川の水は少し白濁していた。当時の小学校の先生は、「矢田川の上流が瀬戸を通るため、その影響で水が濁る」と説明してくれた。確かに地図を見てみると、矢田川はその上流で瀬戸川と合流して流れて来る。瀬戸川は「やきもの」の町である瀬戸市を通って流れているので、陶土によって川の水が白濁するのは道理にかなっている。瀬戸は今でも陶磁器の町であるが、今はもう矢田川の水は濁ってはいない。またその後評者が社会人となり移り住んだ名古屋市東区には、「名古屋陶磁器会館」や「日本陶磁器センター」など第二次大戦以前に建てられた陶磁器に関連した建築物が現存する。そうした折に、この『輸出陶磁器と名古屋港』（以下文中では「本書」と記す）という出版物が刊行されていることを知り、評者は興味を持った次第である。評者はたまたま経済学に関する研究によって生計を立てていたこともあり、瀬戸と名古屋の陶磁器産業はいったいどのような関係にあり、またどのように発展してきたかという疑問を抱いた。それがこの書評の執筆を試みようと思った動機である。

本書によると、鎌倉時代頃に東海地方で陶器の製作が始まったと考えられている。このことは、この地方に陶磁器の原材料となる陶土が大量に堆積していることに起因している。陶磁器の原料となる陶土が存在するためには、主に流紋岩（火山岩の一種）や花崗岩（深成岩の一種）が風化し細粒化した地層が存在する必要がある。

歴史的に順を追ってみてみると、まず流紋岩については、中世代白亜紀後期（8500 万年前～7000 万年前）に現在の中津川市から恵那市にかけての大規模な火山活動によって、富士山の堆積の 15 倍もの量の長石、石英、珪酸に富む「濃飛流紋岩」が東海地方の基盤岩を形成した。その後新中世（1200 万年前）以降の地殻変動により隆起山地が形成され、古期花崗岩類が破砕、風

* 愛知学院大学経済研究所特任研究員（外部）、中京大学経済研究所特任研究員
Email: ermine@dpc.agu.ac.jp、kmorikforward@mbp.nifty.com

化して、先に述べた流紋岩とともに水流により流されて窪地に運ばれ堆積盆地となった。しかしこうして形成された陶土の元になる物質が現在まで多く残留するには、もう一つ不可欠な要因があった。それは「東海湖」という巨大な淡水湖の存在である。「東海湖」は、500 ～ 700 万年前の地殻変動により形成され、200 ～ 500 万年前には、伊勢湾を取り巻く三重県から知多半島、尾張地方、東濃地方へと拡大して現在の琵琶湖の 6 倍と最大の大きさとなった。この東海湖には、主に古木曽川によって周辺部から土砂が流れ込み、大量の陶土、粘土、砂、礫を堆積させた。もしもこうした土砂が海に流れ込んだとしたら、やがて堆積物はかなり散逸していただろうし、海水への堆積であると、多くの陶磁器製品の燃成に不適切な成分を含んでしまっていたことだろう。こうして上層に厚い丸石礫層が堆積したことも幸いして、その後の地殻変動によって東海湖が消滅した後も、莫大な陶磁器の原材料を、かつて湖が存在した地域に残すことになったのである。こうした大規模な陶磁器原材料の蓄積は、日本の他の地域には類を見ないものであり、後の東海地方の陶磁器産業の発展に大きく寄与することとなった。

ここで東海地方での磁器生産の始まりについて述べる前に、まず日本において磁器の生産がどこでどのように始まったかについて触れておきたい。日本における磁器生産の開始は、豊臣秀吉の朝鮮出兵（文禄の役（1592）と慶長の役（1597））の際に、朝鮮半島から多数の陶工を捕虜として連れ帰ったことに端を発している。とくに肥前藩主の鍋島直茂が連れ帰った李参平は戦中日本側に協力したこともあり、また高い技術を持っていたことから重用された。彼は有田郷にて最上級の陶土を発見し、陶磁器生産の技術を伝えた。そうした磁器生産技術は 1600 年代中期に初代・酒井柿右衛門が成功した優雅な染付・華麗な赤絵を施した磁器の生産に結実し、こうした有田での磁器は「伊万里」の名称で有田焼としての名声を高め、江戸、大坂、京都で珍重されたが、鍋島藩はこうした磁器の独占と生産技術漏洩対策を取った。

こうした状況下にあって他藩でも良質な磁器生産の期待が高まるが、高度な磁器製作の技術を入手しないことには如何ともしがたかった。これは、前述のように豊富な原材料に恵まれながらも、主に陶器しか生産していなかった瀬戸においても同様である。そうした状況において、1800 年代初期に加藤民吉という陶工が、肥後の天草に天中和尚という瀬戸出身の人物がいることを知り、彼を頼って九州に出発する。そして加藤民吉はその情熱や人柄、働きぶりを評価されていたこともあり、当初は天草の磁器（高浜焼）の手法を半年間学び、その後に有田近くの肥前の陶工の福本仁左衛門の娘婿となって働いた。その際に福本仁左衛門が二ヶ月間留守にする機会があり、窯を任せられた加藤民吉は、この短期間に技術を習得した。その後恩返しに一年間そこで働いた後、1807 年に福本家を去った。当然福本家は引き留めにかかったが、このとき加藤民吉が帰郷できたのは、天中和尚の手回しがあったためであると言われている。

ただし福本家を去ったとき、加藤民吉はまだ上絵付けの手法を習得していなかった。そこで彼は瀬戸への帰路の途中、九州で最初に世話になった天草の上田源作の元を再度訪ね、そこで上絵付けの技法を授けられることとなった。このように加藤民吉は、天中和尚の人的ネットワークに支えられて、九州の多くの技術者達の磁器製作のすべての技法を身につけ、瀬戸に戻ることができた。そしてその後彼の磁器製作技術を伝授された人々の努力により、瀬戸は肥前磁器に対抗できる品質と量産体制を確立する。すると今度は尾張藩が瀬戸焼を藩の統制品として専売とし、江戸、大坂、京都を中

心に人気を博し、「せともの」の呼び名が定着することになったのである。

加藤民吉に関して評者は本書で初めて知ったが、彼の行ったことは、現在の基準からは産業スパイまがいともとれるような行動と考えられ、その加藤民吉が瀬戸の磁祖となって磁器生産の技術を瀬戸にもたらしたことは興味深い。しかしながら後の歴史を考えると、尾張藩において磁器産業が発展するのは既に 1800 年代に入ってからであり、いずれ明治期になり鍋島藩が統制によって磁器製作技術を独占することは不可能になるため、加藤民吉の行動は、瀬戸の磁器産業の発展を少しばかり早めたにすぎないと考えることもできる。実際加藤民吉の評価は現在でも高く、瀬戸一帯では 1932 年より彼の遺徳をしのぶ目的で、「せともの祭り」が、今日まで毎年開催されている。

時代が明治になると日本は近代的な国家になることが求められ、陶磁器産業の役割もそれに沿ったものに変容していく。1871 年の廃藩置県で藩の陶磁器産業保護が廃止されると、税金を払うことを条件に自由な企業活動が認められ、陶磁器産業も自由競争の時代に入った。1873 年に開催されたウィーン万国博覧会への参加を決めた日本政府は、ドイツ人ゴット・フリート・ワグネルを技術指導者として招いて新たな技術の習得を開始し、陶磁器の輸出振興のための基礎作りを始めた。

こうした中でまず森村組（現ノリタケカンパニーリミテッド）が、1901 年に工場、画工を名古屋市東区へ移転し、いわゆる「名古屋絵付」の主役として輸出磁器をリードするようになった。そして後述するように様々な交通インフラが次第に整備されてくると、瀬戸、東美濃、名古屋地域が日本窯業の中心地を形成していく。やがて陶磁器生産は、素地生産を瀬戸、東濃で行い、絵付を名古屋で行うといった分業体制が次第に確立していき、全国陶磁器生産における愛知県の地位は飛躍的に上昇していった。

ここでまず素地産業としての瀬戸、東美濃の発展から見ていくと、当該地域の窯はもともと多くの中小、零細企業から成っていたため、通常であれば陶磁器に対する需要変動の影響を受けやすかったはずである。ところがこの地域の素地業者は、半農半窯の形態が多かったため、景気が悪い時には農業にウェイトを置くことで不景気の影響を軽減し、これをしのぐことがある程度可能であるという利点を持っていた。

次にインフラの整備と名古屋における絵付の分業化の進展について見ていくと、まず東濃地域では、1900 年の名古屋・多治見間においての中央本線（全線開通は 1911 年）の開通によって、鉄道を通じての日本全国への製品出荷が可能となった。また瀬戸においては、瀬戸・大曽根間の道路（瀬戸街道）の改修が行われ、さらに 1906 年には瀬戸・大曽根間で瀬戸電気鉄道（現在の名鉄瀬戸線）が開通すると、瀬戸から大曽根へと瀬戸電気鉄道によって陶磁器を運び、そこから中央本線を使って全国へと出荷することができるようになった。輸出目的の陶磁器生産は当初、堀川から艀に乗せて既に開港していた四日市港へ運び、さらにそこから横浜港、神戸港へ船で運んで欧米へ輸出することが多かった。その後名古屋から直接海外への大量輸出ができるようになり、また素地を瀬戸・東濃地域で生産、絵付を名古屋で行うといった分業体制の確立を本格的に可能にしたのは、なんといっても 1907 年の名古屋港の開港に負うところが大きい。名古屋港開港以前に名古屋から陶磁器を輸出するには、堀川の水運を利用して熱田湊まで艀によって陶磁器を運び、沖で大型船に積み替えて欧米に向かう必要があった。熱田湊では物理的に大型船の入出港ができなかったからである。

ところで名古屋には、横浜や神戸とは異なり、天然の地形を利用した大きな港を作ることがそれほ

ど容易ではなかった。そして名古屋港の建設は、当初地元ではあまり歓迎されていなかった。名古屋港の建設は 1886 年から始まるが、国から施工認可が下りても国庫補助が不許可となったため、第 3 期工事までの整備は地元の負担で進めなければならなかったからである。とくに日清戦争後の不況の影響によって県民の税負担力が急激に低下し、県財政を圧迫した時期においてはなおさらで、県民への税負担を理由に県会において工事延期論が叫ばれたこともあった。しかしながら名古屋港が開港すると、それはこの地域の窯業製品の輸出を大きく発展させた。この点では先見の明があったと言える。こうして 1909 年からは瀬戸電気鉄道による輸送と、艀による堀川の水運を利用した運搬によって、愛知県において生産された磁器製品は、名古屋港から直接海外に輸出することが可能になった。

瀬戸電気鉄道については、もう少し補足しておく必要がある。1906 年に瀬戸・大曽根間に開通した瀬戸電気鉄道は、1909 年に大曽根から、名古屋市中心部へと延伸された。現在の名鉄瀬戸線は、清水駅と東大手駅の間で地下に入り、栄町駅まで通じているが、これは 1976 年以降のことであり、それ以前は、この鉄道の延長部分は、かつて存在した土居下駅を通過すると名古屋城の外堀（空堀）の中を通って、堀川近くまで通じていた。評者は名古屋城の堀の中を走行する名鉄瀬戸線を、子供の頃に何度か見たことがある。瀬戸電気鉄道の延伸により、瀬戸から瀬戸電気鉄道、堀川、名古屋港を経て海外へ陶磁器輸出を行うルートが確立したのである。本書によると艀を用い堀川を経由して名古屋港に向かう運搬は、昭和 30 年代あたりまでは多かったという。そのため輸出磁器の絵付工場は、とくに名古屋港近くに立地する必要はなく、このルートの交通の要衝である大曽根近くの名古屋北東部（東区と北区の一部）に集積していった。

名古屋市東区に陶磁器の絵付業者が集積したのには、別の理由もある。東区にはもともと江戸時代には武家屋敷が多かった。そのため明治維新後に没落した武士の広い屋敷の敷地を、絵付工場用の土地として安価に入手し転用することが可能であった。やがて絵付工場の集積は、この地に絵付薬品や各種原料を扱う業者、輸出業務を行う海運業、運送業、梱包業、銀行、郵便、通信業者を呼び込み、さらにもともと有田、京都、九谷で活躍していた絵付職人をもこの地に移住させることもできたのである。

ところでこのように発展していった名古屋陶磁器業者達には、いわゆる「西向き」と「東向き」と言われる独特の分類があった。当時アメリカを中心とする海外への輸出の中核をなしていた磁器製品は、ディナー用硬質白磁素地のものであり、これを生産できたのは、先に触れた森村組が設立した「日本陶器」と、名古屋の財界がバックアップして設立した「名古屋製陶所」（現在の鳴海製陶）、そして瀬戸の「白素地五社」に限定されていた。このうちとくに資本力が大きく名古屋市西部（西区則武町）に位置していた「日本陶器」は別格的な扱いで、日本で初めてドイツ製の石炭釜を用いて硬質白色磁器を完成させ、絵付けまでの一貫生産体制を備えていた。そのためこの「日本製陶」のことを「西向き」と呼び、その他の中小企業群から成り、その大部分が名古屋市の北東部に結集していた業者達を「東向き」と呼んで区別していた。「西向き」と呼ばれた「日本製陶」を設立した森村組は、モリムラ・ブラザーズという企業をニューヨークにいち早く設立し、現地でどのような陶磁器の需要があるか、どのような技術が用いられているか等の情報を日本本社に報告して生産を行っていた。こうした情報収集や生産技術の進歩のおかげで、森村組の設立した「日本製陶」は、明治中期以降にはいち早く海外での販路を拡大することが可能となっていた。

それに対して「東向き」業者達の特徴は、「加工問屋」業としての性格がその中核をなしていた。それらの企業群は、上絵付専門の下請工場を傘下に置き支配する一方で、素地業者に対しては、価格交渉力で優位な立場を保ち、また輸出業者に対しては多様な商品を注文通りに納入する役割を担っていた。時代を経るに従ってこうした「加工問屋」は、次第に加工完成業という業種として「工業にあたる」と商工省に認可され、「日本陶磁器工業協同組合連合会」に加盟することができた。現在も名古屋市東区に存在する「名古屋陶磁器会館」は、こうした輸出陶磁器に関わる「東向き」業者の拠点であった。

こうした「西向き」、「東向き」企業ともに、日本が太平洋戦争に突入する前までは比較的順調に海外輸出を拡大していったのであるが、とくに陶磁器輸出が増加したのは、第一次世界大戦以降である。これは第一次世界大戦までヨーロッパ最大の陶磁器生産国かつ輸出国であったドイツの輸出が戦争の影響により停止し、愛知県の陶磁器産業がドイツの輸出市場に入り込む余地が生じたためである。もちろん愛知県の陶磁器産業がこの時期に大きく拡大できたのには、品質の向上や輸出相手国のニーズの収集といった企業努力が結実したという背景もある。また第一次世界大戦頃から愛知県陶磁器産業では、電力の利用と石炭釜が急速に普及している。これには名古屋港開港により、輸出船が輸出先からもどる際に、筑豊炭田からの石炭を積んで帰港し、エネルギー源の供給が容易になったことが大きく寄与している。さらに一部では海外から輸入した石油も陶磁器の生産に用いられるようになった。こうした中で輸出主要商品であった硬質白色磁器のディナーセット及びコーヒー椀皿、ノベルティ商品は、品質、実績において高い競争力を持つようになり、戦間期において、日本はドイツやイギリスに肩を並べる陶磁器輸出国となった。実際に本書に掲載されている 1913 年と 1935 年の統計を比較してみると、日本製陶磁器の海外市場におけるシェアは、米国では 11.8％から 57.8％、英領インドでは 10.0％から 58.6％へ、蘭領東インドでは 2％から 81.6％へと大きく上昇している。こうした世界市場における日本の陶磁器のシェア拡大には、愛知県で生産され、名古屋港から輸出された陶磁器製品が大きく貢献していることは言うまでもない。

しかし当然のことながら、日本が日中戦争に突入し、その後第二次世界大戦に参戦する中で、愛知県陶磁器産業に徐々に統制色が強まり、業態変更を余儀なくされる業者も現れた。最終的には空襲によって生産設備が破壊されると、実質的な磁器生産活動はほとんどできなくなった。

第二次世界戦後の磁器生産の再開は、まず日本に駐留する米軍関係者やその家族向けの家庭用食器の受注から始まった。とくにアメリカ人は、「ノリタケチャイナ」の品質の良さをもともと知っていたため、その復活を望むアメリカ人も多かったと本書には記載されている。こうした背景から、暫定的な他ブランド名での生産を経て 1948 年には「ノリタケチャイナ」は復活した。その後他の業者も徐々に復興し、まず「Made in Occupied Japan」としての磁器輸出が再開され、サンフランシスコ講和条約後には、正式に愛知県で生産された日本製磁器輸出が、主にアメリカ市場向けに拡大していった。第二次大戦後の愛知県の窯業生産・輸出は、当時の他の日本の製造業と同じく朝鮮戦争勃発による特需や、高度経済成長を経て拡大していった。本書によると 1950 年代後半ではアメリカ市場における日本製陶磁器製品のシェアは、ほぼ 60％にも達したという。米国に輸出された陶磁器製品の内訳は、1950 ～ 60 年代にかけてはディナーセット等の洋食器が中心であり、1960 年代以降は、これにノベルティとタイル製品が加わっていった。しかしこうした輸出は、ニクソンショック等により徐々に価

格競争力を失い、最終的にはプラザ合意による円高と、安価な中国製品の世界的な広がりにより、その地位を低下させる。しかし現在でも一定程度名古屋港からの陶磁器輸出は存在するし、また本書では触れられていないが、製品のデザインや企画を日本で行い、中国で海外生産した製品を日本に逆輸入している名古屋の磁器企業も存在するようになった。

最後に、本書に記載されている名古屋港の輸出統計から、産業別の輸出シェアの推移を見ていくことにする。名古屋港が開港した 1907 年以降における名古屋港の「陶磁器」産業に分類されている輸出金額は、1907 年から 1987 まで毎年常に上位 10 品目に入り、そのうち 13 回も品目別輸出のトップの座にあった。時系列的に見ていくと「陶磁器」が名古屋港輸出統計の輸出金額において最高額を達成するのは 1984 年であるが、「陶磁器」の輸出が最後に品目別の首位を取ったのは 1966 年であり、その後の名古屋港輸出では、現在に至るまで「自動車」がずっと首位となっている。このことから 1960 年代の後半あたりから、愛知県の産業構造が徐々に変化し始めたことが分かる。確かに今日では、愛知県陶磁器産業はそのピークを過ぎたことは明らかであるが、愛知県陶磁器産業のトップランナーであった「森村組」から派生したいわゆる森村グループの企業には、「ノリタケカンパニーリミテッド」、「TOTO」、「日本ガイシ」、「日本特殊陶業」等があり、これは現在でもかなり大きな企業集団である。従ってその日本経済に占める重要性を考えるとき、愛知県陶磁器産業の歴史を振り返ることには大きな意味があり、その解説書として本書は、一般にはほとんど知られていない重要な内容を含み、秀逸である。また名古屋港の開港と発展との関連というユニークな視点で書かれた本書は、現在輸出量・貿易量において日本最大である名古屋港貿易を研究する評者のような研究者だけではなく、日本経済を研究する者にとっても大きな意義を持つはずである。